

10月総評 西躰 かずよし

投稿の水準が高くなってきているように感じる。今月は書き手のみずみずしい感受性を投影したような作品に多く出会えた。みなさんの作品を通じて書くことについて私自身も考えていきたい。

首すじも乳ぼうもさらしたよ
けど わたしのなかの紫の鳥居 藤ほたる（神奈川県）

今回もっとも惹かれた作品。作品からはジェンダーの痛みといったようなものが感じられる。特に後半部分の「わたしのなかの紫の鳥居」という表現は秀逸。この作者にはほかにも「教会にほんのひととき溶けこんで／贖物なんだわたしのふたえ」、「ぴかぴかのゆでた卵のいのち乗せ／スクールバスは遠くにゆきたい」といった作品がある。いずれの作品も日常をとおして生のありようが描かれる。

おなじ教室
ようかんみたいな空気に
今日もとじ込められる 村上 陽香（北海道）

かつて感じた教室の息苦しさをこの作品は代弁してくれる。

グラタンが合うので冬の夜がすき さいう（愛知県）

飾らない言葉そのままを作品にするというのは書き手にとってひとつの理想であるが、作者はそうしたところへ行こうとしているようにも見える。まっすぐな書きぶりはこの書き手の持ち味だろう。ほかの「面談を終えていつもの帰り道／夕日がこわいかおをしている」といった作品についても同じことが言えると思う。

君の隣で簡単な身体になる
ベランダに雪うっすらと 中矢 温（東京都）

鋭敏な感覚をもとに構成されている作品。作者はとても耳のいい人なんじゃないだろうかと思う。そして目も鼻も。そんな風を感じるのは、この作者の力量よるところが大きい。ほかにも「花束のうっすら光る君の夜」といった作品がある。